

## 障害学生支援センター 交流会

平成 28 年 12 月 17 日(土)

参加者：福岡教育大学 12 名、九州大学 3 名（うち遠隔参加 1 名） 計 15 名

卒業生：8 名

### 【第一部】パネルディスカッション 13:30~15:00

参加者の自己紹介ののち、卒業生から 1 人ずつ障害学生支援センターでの活動や、支援についてお話をしてもらいました。

九州大学からは、  
遠隔（ビデオチャット）で  
参加しています。



#### I.O さん（特別支援教育課程 卒業）

自分から支援を頼むこと下手で、不安もあったけど、入学前に支援センターの職員や視覚障害専門の先生と話すことができ、だんだんと支援について伝えることができるようになっていきました。支援について、上手く伝わらないことが多かったので、先生や友達、学生同士でももっと仲良くなって話しやすい関係を作れていれば、自分からももっと上手に障害のことを上手く伝えられたと思うし、支援もスムーズに頼むことができたのかな？と 4 年間を通して学ぶことができたと思います。

#### Y.W さん（特別支援教育課程 卒業）

自分の障害や支援についてよく分かっていなくて、ネガティブにとらえていたけど、「言わないと分からない」ということを教えてもらって、大学生だし、自分で担当の先生にコミュニケーションをとっていくことが大事だと感じました。自分の障害について考えるのが遅かったので、視覚補助具も手元になかったけど、支援室の備品を貸してもらったり、拡大読書器などの視覚支援機器を紹介してもらって、個人的な購入にも踏み出せました。支援を受ける上では、支援する側の人もあるので、「よろしくお願いします」「ありがとうございます」は、大事にしたいなと心がけていました。

#### N.I さん（特別支援教育コース 卒業）

支援室が立ち上がる前は個人的に支援をお願いすることが多かったけど、支援室という存在があると、先生とか友達が「聞こえなくても分かるようにしないとイケないのかな？」と思うきっかけになったと思う。でも、まだまだ障害のことや支援内容についても知らなかったり、勘違いしていたり、忘れてしまったりする人も多いので、毎回あいさつしたりすることも大事だと思います。だんだん理解してくれる人が増えるのは嬉しかったです。周りの人の気持ちが変わってくるきっかけにもなって、支援室があってよかったって思っています。

#### N. I さん（初等臨床教育課程 卒業）

なんとなく自分は周りの友達とは違うってことを感じていたけど、高校までは困ってませんでした。だからなんでテイクをつけないといけないのか分からなかったけど、自分から支援を頼む方法が分からなかったの、しょうがなく支援室を頼りました。でも、周りが理解してくれないことが多くてモヤモヤしてる時に、自分の障害について話せないといけないって先生が叱ってくれて、自分が困っていることは何か考えて、周りに伝えないといけないことに気づきました。自分が伝えることで、テイクが難しい学外の活動では友達が自然に助けってくれたり、先生も支援に協力してくれたりして、周りが変わることを実感しました。また、同じ聴覚障害の先輩や支援をしてくれている学生と関わる中で、自分はここが分かってない、こんな支援がほしいって考えることができました。支援室がなかったら、周りは何も分かってくれないって、1人だけ被害者意識のままだったかもしれません。

反省しているのは、自分だけに必死で先輩とあまり関われなかったこと。自分が先輩たちに教えてもらったこととか、やってきたことを先輩にもっと伝えられればよかったです。

#### K. N さん（福祉課程 卒業）

支援室の活動に興味があったし、バイトもしていなかったの、1人で飛び込んでみたのが、支援活動を始めたきっかけです。でも、学生や課程を超えて友達ができたり、自分の中で1つのコミュニティとして支援室があって、学生生活が楽しくなった1つかなと思います。テイクをする中で聞こえない学生の気持ちを考えたり、手話を勉強するきっかけにもなったのでよかったです。



テイクをしながら利用学生に伝わってるかな？と心配することもあったので、テイクの情報を頼っているんだということを意識してテイクするといいと思います。テイクは休んだり遅刻したりしないように！責任を持ってやってほしいです。

#### R. K さん（中等英語 卒業）

先輩から誘われて、自分が英語科で英語のテイクに必要だと感じて支援活動を始めました。テイクにはタイピングのスピードも大事だけど、どうしたらペアのテイクと上手く連携入力できるかを考えながらテイクしていました。利用学生にとっても見やすさ・分かりやすさもそうだけど、ペアのテイクのことも考えるとテイクしやすいと思います。お互いにアドバイスできて、利用学生のニーズに合わせたテイクができればいいと思います。それを先輩に伝えられればよかったってちょっと後悔しています。

あとは、授業担当の先生ともコミュニケーションをとっておくと、授業の情報を教えてもらえることもあるからいいかも。テイクを始めたのは遅かったけど、教採でアピールできたのはよかったです。今は高校で教員をしていて、現場では障害のある学生はいないけど、支援室での活動は、個々に合わせた授業を考えるきっかけになったと思います。



M. O さん（教育臨床心理学コース 卒業）

学生への支援に興味があつて文字起こしとかならできるかなと思つて支援室に登録したけど、支援室のスタッフに誘われてテイクも始めました。コミュニケーションをとることは苦手だったけど、テイクに入ったり反省会に参加したりする中で、同じ聴覚障害でもレベルや育ってきた環境、求めている支援も違うので、コミュニケーションは大事だと感じました。もっと早く気付ければよかったです。普通の会話とか、そういうところからでもいいのでお互いのことが分かってくると、寄り添った支援というか、そういうことに近づいていくのかなと思います。今は臨床心理士として働いていますが、コミュニケーションが大切だということが仕事にも活かしています。

N. N さん（障害児教育課程 卒業）

私が支援活動を始めたのは、本当に今から支援のスタイルを作るという最初の時で、始めはボランティアでした。それが今は支援センターという全学的な組織になって、いろんな人が頑張ってきたんだなつて感じました。そんな最初の時期だったので、利用学生の意見をひろつて支援ができなかったことが心残りです。

今、言語聴覚士として説明する・伝える立場にいますが、やっぱり人とコミュニケーションをとることはすごく大事で、伝えないと支援は進まないし、具体的に教えてもらわないと分からないことがあるつてことを実感しています。大学生つて自分から初めて伝える側に立つ時期で、戸惑うこともたくさんあると思うけど、頑張つてほしい。支援活動を通して、役に立つことはたくさんあると思う。こういう障害があつて、こういう支援が必要な人がいるということを知ると、（教員を目指している学生もたくさんいると思うけど、）現場でその子どもたちのため何ができるか考えることにもつながると思います。



【第二部】グループセッション 15:00~16:00

グループセッションでは5つのグループに分かれて、支援活動や学校生活、就職について相談や意見交換を行いました。各グループで話題になったことについてそれぞれの参加者に内容をまとめてもらいました。

<グループ1>

私達のグループでは、現役生が2人も教員志望ではないこともあり、教員以外の就職先、就職活動について話をしてもらいました。施設などに就職するのであれば求人は表に出てこないの、先生やボランティア先などで繋がりをたくさん持ったり自分から求人を探めたりすることが大切だということでした。また、実際に自分の目でその施設を見に行くことを勧められました。なかなか、実際の就職活動の話聞く機会がないので、そういった話を聞けて良かったです。



### <グループ2>

グループ2では、福岡教育大学の学生・卒業生、九州大学の学生がいたので、お互いの支援内容について話しました。九州大学では、支援する人も少ないし、技術を持った人が他の人に伝達している途中とということでした。

利用学生の卒業生の話では、大学に入学し、支援センターで支援を受けるようになって、自分の障害について考えるようになり、周りの先生や友達も障害について理解してくれるようになった。

支援センターの支援が受けられない場合や支援機器が使えない状態であっても、友達が手助けしてくれるようになった。「物（支援機器等）に頼るのもいいけど、人にも頼る」ことができる環境ができたという話が印象に残りました。



### <グループ3>

グループ3では、利用学生の学生生活、主に寮生活やアルバイトの話があがっていました。寮内アナウンスや集会で友人に助けてもらっていたことや、アルバイトの接客時にお客様の言葉が分からなくて困ることもあったけど、慣れるにつれて何を求められるかなんとか分かるようになってきたり、周りの理解で電話を取らなくてもよいなどの配慮をしてもらえたなどの話を聞きました。しかし、電話がとれないという理由で雇ってもらえないことが多かったり、キャンペーン企画に対応できなかったりして、バイトを辞めざるを得ないという経験があったと話をしてくださいました。利用学生の気持ちや日常生活の中で聴こえないことでの苦勞などを知ることができたと感じています。

また、利用OB学生からの職場（特別支援学校）についてのお話では、行事で和太鼓などの打楽器を叩いてパフォーマンスをする発表のための練習中、児童に（どのタイミングで叩くかなどの）指示を出す際、上手くりズムが取れず指示出しを他の先生に代わってもらったなど、社会に出られて直面した困難について話をいただきました。



聞こえないからできないことはたくさんある、それは仕方ない、けどその代わりに逆に自分ができることってなんだろう、代わりにすることは？っていうものを探すのが難しいという話を聞いてなるほどと思いました。

卒業生の話が聞ける貴重な機会で自分自身いろいろと刺激を得ることができました！

#### <グループ4>

グループ4では弱視の卒業生の先輩に、知能検査や盲学校での板書など、学校現場で実際に直面した課題について伺いました。その上で、大学在学中から準備しておくの良いことをアドバイスしていただき、教員になるためのビジョンをより明確に掴むことができました。

それまで、同じ障害のある方の教員としての体験談を聞く機会はなかったため、とても充実した時間でした。お話を聞く中で、実際に授業をしている様子を見学したいと思いました。



手話が得意なサンタ  
です！



#### <グループ5>

視覚障害と聴覚障害における普段の生活の中で不便だなと感じることの共通点や相違点等について話しました。また、障害をもって社会に出たときに、どういうことに注意しなければならないのか、大学生の間にどんなことをしておくべきなのか等について、卒業生からアドバイスをもらったりしました。普段、障害がありながら生活する人の話を聞くことは機会があまりないので、聞くことができている経験ができたなと思います。

#### <まとめ>

2009年から障害学生支援室、昨年からは障害学生支援センターとして利用学生の大学生活の支援を行ってきた。立ち上げから現在まで、困難もあったと聞く。けれど、そのおかげで今の支援体制が整い、この間に巣立った利用学生・支援学生が立派な教員/社会人となりOB・OGとして、現役生にアドバイスしている。その姿を見て、支援を積み重ねてきたことが、卒業した学生を呼び寄せ、新たな教員養成/人材育成にもつながっているのだと感じた。

また、今回は九州大学からも遠方から交流会に参加いただき、その積極性に本校の学生も刺激を受けていた。彼らからは九州大学での支援の課題や、大学間の支援の違いなど聞かせていただいた。

次年度もこの取り組みを踏まえ、障害学生の支援を積み重ねていきたい。